

## 本 迹 相 対

—始成と久成・教理と仏身—

前回（本紙九四一号）の権実<sup>ごんじつ</sup>相対では、大乘の中でも法華經（実教）が勝<sup>すぐ</sup>れ、爾前<sup>にぜんぎょう</sup>經（権<sup>ごんきょう</sup>教）が劣る故に、成仏直道の法門として法華經の教えを選び取ることを述べました。今回は、さらにその法華經においても、本門と迹門との相違があり、これを相対して勝劣を分別し、迹門より本門が勝れていることを述べます。

### 理の一念三千

法華經二十八品のうち、迹門は『序品第一』から『安樂行品第十四』までの前半部分を言い、内容の中心は『方便品第二』です。

ここで説かれる重要なことは、諸法実相と二乗<sup>にじょう</sup>作<sup>さぶつ</sup>仏です。これによって、爾前<sup>にぜんぎょう</sup>権<sup>ごんきょう</sup>經に二乗不作<sup>にじょうさぶつ</sup>仏と説かれていた大きな欠点を解決し、他經には見られない十界互具・百<sup>ひゃく</sup>界千如<sup>かいせんによ</sup>・一念三千の法門が説き表わされるのです。

この一念三千の一念とは、一刹那<sup>いちせつな</sup>（瞬間）の心という意味です。三千とは、十界（地獄・餓鬼<sup>がき</sup>・畜生<sup>しゅら</sup>・修羅・人間・天上<sup>しょうもん</sup>・声聞<sup>えんがく</sup>・縁覺<sup>くかい</sup>・菩薩の九界と仏界）が互いに具有（十界互具）し合って百界となり、この百界がそれぞれ十如（相・性・体・力・作・因・縁<sup>えん</sup>・果<sup>か</sup>・報<sup>ほう</sup>・本末究竟<sup>ほんまつくきょうとう</sup>等<sup>ぜ</sup>の十如是<sup>そな</sup>）を具えて千如となり、さらにこの千如が三種（五陰<sup>ごおん</sup>・衆生・国土）世間にわたって表われていることから、三千の意義が成立します。

すなわち、一瞬の心の動きの中に、三千という一切法が具わっているというのが、一念三千の法門です。

### 迹門の失

しかし、迹門で説かれる一念三千の法門には、本無<sup>ほんむ</sup>今有<sup>こんぬ</sup>・有名<sup>うみょう</sup>無実<sup>むじつ</sup>の失<sup>とが</sup>があります。

釈尊は初めて本門『寿量品』で、これまでの始成<sup>しじょうしょうがく</sup>正覚（十九歳で出家し、三十歳で初めて仏に成った）という仮の立場を<sup>はら</sup>発<sup>く</sup>して、久遠<sup>くおん</sup>実成<sup>じつじょう</sup>（久遠の昔に仏に成った）の本地<sup>ほんち</sup>を<sup>ほつ</sup>顕<sup>しゃく</sup>しました。これを<sup>ほつ</sup>発<sup>しゃく</sup>迹<sup>けん</sup>顕<sup>ほん</sup>本<sup>ほん</sup>と言いますが、迹門では未だ発迹顕本<sup>ほつしゃくけんほん</sup>されていないので、この一念三千は本無今有であり有名無実となります。

つまり、迹門は諸法実相（理）の上から一念三千を説くので「今有」ですが、久遠実成（本仏の常住）が解き明かされていないので「本無」となります。

また迹門に、二乗・悪人・女人等も成仏できると説かれていますが、釈尊を成道せしめた根源の種子（本法）が明かされていないため、仏の始成正覚<sup>しじょうじやく</sup>に執着<sup>しやく</sup>し、久遠の本

因本果を知らないのです。ですから、迹門の一念三千は、成仏という「名」はあっても「実」がなく「有名無実」です。

したがって、この一念三千の法門は、あたかも水中の月、波の上の根無し草のようなもので、本門の久遠実成を明かす法門には遠く及びません。

### 本門『寿量品』の三妙合論

本門は、『從地涌出品第十五』から『普賢菩薩勸発品第二十八』までを言い、『寿量品第十六』が中心となります。

本門で重要なことは、釈尊が『寿量品』で久遠実成を明かしたということです。これは、久遠成道の因果と、その化導の国土を明かすことによって、仏身に具わる一念三千を、釈尊の現実の身の上に説き顕わしたものです。このことを三妙合論さんみょうごうろんとも言います。これによって成仏の根源が明らかになるのです。

そこで本因ほんにん・本果・本国土の三妙を経文あを挙げて示します。

本因妙—「我本行菩薩道。所成寿命。今猶未盡。復倍上数」

本果妙—「我実成仏已来。無量無辺。百千万億。那由他劫」

本国土妙—「我常在此。娑婆世界。説法教化」

本因妙とは、五百塵点劫の仏果を成ずるための修行を示したものですが、これは仏の境界に具わる九界の常住を明かしています。

本果妙とは、始成正覚としてきた釈尊の仮の姿を打ち破って、五百塵点劫の久遠の本地を示し、これに即して仏の常住を明かしています。これによって爾前権經に説かれた、阿弥陀如来・大日如来等の仏は、久遠の釈尊の垂迹化他の仏であり、『寿量品』の釈尊の一身に、すべての諸仏が統一されたのです。

本国土妙とは、仏の住する国土を明かしています。これまで仏の住処は十方浄土であり、この娑婆世界しゃぼは穢土えどであると説かれていましたが、『寿量品』で初めて、久遠実成の本仏の本国土がこの娑婆世界であることが説かれ、一切の仏土が統一されたのです。

このように本門『寿量品』の説法によって、迹門の教理、つまり成仏の因果はことごとく打ち破られ、真の一念三千の法門が成立するのです。

これを大聖人様は『開目抄』に、

「本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって、本門の十界の因果をとき顕こはす。此即ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界そなに備はりて、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし」(御書 五三六)

と、本門の勝れていることを示されています。

この三妙合論によって、釈尊在世の衆生は、久遠の昔に下種された本種子を思い出し、深い信心をもって一体となり成仏を遂げるのです。これをもって、久遠以来の下種結縁けちえん

による衆生への釈尊の化導は、完結するのです。

### 迹面本裏と本面迹裏

このように迹門と本門とでは、天と地、水と火の如き大きな違いがあります。

像法時代の天台大師は、本門の重要性を知っていましたが、時と機根きこんに合わせて法華経の迹門を面おもてとし本門を裏として、迹門の教えを中心に一念三千を説きました。このような天台の立場を迹面本裏しゃくめんほんりと言います。

これに対して、末法御出現の大聖人は、一往、本門を面とし迹門を裏とする本面迹裏ほんめんしゃくりの立場をとられています。

しかし、その真意は、熟脱じゅくだつの法である文上もんじょう教相上の本門・迹門を共に迹とし、寿量じゆりやう文底もんてい独一どくいちの本因下種本門こそ真の本門とされるものです。



以上、法華経の本迹二門の勝劣を述べましたが、本迹相対で示される本門の一念三千といえども、大聖人の独一本門から見れば、本迹共に理の一念三千となり劣るのです。

それ故、私たちの成仏のためには、大聖人の種脱相対によって示される、事じの一念三千を選び取ることが肝要なのです。